

徳法寺

ごあいさつ

杉谷 伊吹

皆様ごきげんよう、初めましての方は初めまして。徳法寺現住職 杉谷淨の息子 杉谷伊吹です。寺の跡を継ぐため、京都の大谷大学に行かせて頂いておりましたが、今春無事に卒業し帰ってまいりました。おかげさまでここまでやって来ることができました。

ここまでの道のりを振り返ると、ご門徒の皆様には本当にお世話になっているのだと実感しております。特に、これまで積み重ねてきた数々の失敗・失態により、たびたびご迷惑をおかけした事については、いくら頭を下げて足りない思いです。また、その失敗のおかげで成長することも出来たと感じています。今となっては大変有り難いご縁をいただいたと感謝しております。

このような、今の自分が様々な方々のおかげで成り立っているという事実は、私が生きる理由の大きな一つとなっています。先人や他者に「恩」を感じるといことが、同時にその「恩」に報いる責任を認識することに繋がり、それが生きる理由にもなるからです。つまり、生かされている身だからこそ、生きる使命を感じるということです。人は一人で生きられないと言いますが、仮に技術の進歩によって一人で生きられるようになったとしても、そこに生きる使命が無ければ、とても味気ない人生になってしまうでしょう。

また、「恩」があってもそれを感じないという状態でも、似たようなことになると思います。今、世の中では過剰なサービスがはびこってしまった結果、他者からの厚意を強要したり、最善の状態を当たり前のものでして求めたりするようになってしまいました。このような「忘恩」の状況は、本来無慈悲である人間の有り様を忘れ、欲を満たすことに傾倒したことが原因だと思えます。例えば、「ありがとう」という言葉が、有ることが難しい稀な厚意への感謝から、当たり前の行為への対価となってしまうということなどが、その一つとして挙げられます。

「忘恩」が人生にもたらす味気なさは、誰も得をしない、悲しい事実誤認から生まれるのです。この様な中で、私が皆様に「恩」を感じることができていることは、大変嬉しいことなのです。これは私の失敗に対して、時に優しく包み、時に叱咤激励してくださった、皆様の「許容の心」によって辿り着けたものです。心が折れてしまわないように、導き・

育てて頂いたおかげで私は今ここにいます。これからも時々失敗しながら、学んで生きていけたらと思っております。今後ともよろしくお願い致します。



我が家の亀です

ウズベキスタン旅行記

杉谷 紬

大学卒業後の春休み、私は友人と九日間ウズベキスタンへ行きました。旅行の下調べには半年以上をかけてはいましたが、やはり実際に行くとは面食らうようなことばかりでした。ウズベキスタンといえばサマルカンドやヒヴァなどの古い都に残されている、青いタイルが美しいモスクや神学校であるマドラサが有名です。ところが、そのような名所では新しいレンガを直接上に貼り付けている最中であつたり、ゴテゴテした電飾がついていたり、また土産物屋に占拠されていたりといった調子で、なかなか昔日の面影を偲ばせてはくれません。ましてや土産物屋やガイドによる、強引な客引きや無茶なぼったくり、様々な違法取引の持ちかけなどによって、歩いていくだけで様々なことに悩まされる始末です。

とはいえ悪い思い出ばかりでなく、地元の人々から町の色々なことを教わったり、一緒にお菓子を食べたり写真を撮ったりと、楽しいこともいっぱいありました。人と人の距離感が近く、特に外国人は目立つのか、どこにいてもすぐに声をかけられました。ほとんどの人はとても好意的で気さくに接してきてくれました。遠足の子供たちに質問攻めにされたり、モスクや廟でお祈りの祝詞の声の美しさに聞き惚れたりしながら過ごす目まぐるしい日々の中で、沢山の出会いがありました。その中でもとりわけ忘れられないのが、ある小さな女の子です。

サマルカンドのバス停でのことでした。ホテルへ向かうバスを待っていました。時刻は夜九時近くなり、タクシーを拾おうか迷っていると、ふとベルの音がゆっくりと近づいてくるのに気が付きました。見るとリヤカーを引いたロバを連れて、若い女性と小さな女の子が歩いていました。二人はバス停の前で止まると、女の子がバス停の脇にあったゴミ箱からペットボトルを回収しました。若い女性はそれを受け取ると、女の子の頭を撫でてからロバと共に通り過ぎたのですが、女の子は私の前へと引き返してまっすぐに手を伸ばしてきました。私はベンチに座っていたので、女の子の顔をまじまじと見るようになりました。髪は結んであるけれどもぼさぼさで、口の周りは赤くべたべたに汚れ、肌は黒く日焼けをしているものの、可愛らしい顔立ちをしていました。その子は無表情のままじっと私を見つめていました。滞在中は市場や盛り場で度々物乞いに纏わりつかれましたが、この時ほどはっとしたことはありませんでした。彼女たちにとつての物乞いが単なるその場のしのぎの行為というよりは、どうしようもなく生活と一体化しているものであることを感じたからです。

ウズベキスタン滞在中に、この国が創造と破壊の入り混じる過渡期の大きなうねりの中にあることを折に触れて感じました。あちこちで急拵えの電飾や、建設中の建物や道路を見かけます。インフレの進行や、子供たちの英語教育の開始など国内の情勢にもどこかせわしなさが感じられます。あらゆるものが今まさに進行中であり、おそらく十年もすれば、ウズベキスタンの状況は大きく変わっているでしょう。その時、かつて私が出会った人々はどうなっているのでしょうか。今回の旅行で目にしたことは、厳然たる現実でありながら、泡沫の夢のようにはかなく貴重な、歴史の一瞬だったように思われるのです。

私は少しの間動けずにはいましたが、隣にいた友達に「いいよね？」と言って、女の子にマーケットで買ったケーキを箱ごと渡しました。女の子はぱっと輝くような笑みを浮かべてその箱を両手でしっかりと抱えると、赤い服をはためかせながら若い女性の方へと駆け出し、夜の闇の中に消えてゆきました。



シャーヒズィンダ廟(サマルカンド)

真宗人物伝（四十七）

杉谷 浄

戸森の唯信

『僧伽』で途中になってしまった「真宗人物伝」をもう少しだけ続けます。今回は親鸞聖人の弟子で、関東二十四輩の第二十二番である戸森の唯信です。

戸森の唯信は、茨城県笠間市にあった宍戸城城主宍戸知家の三男として生まれ、二十二歳での若さで親鸞聖人の弟子となっています。当時は十代半ばで元服を迎えます。この時から一人前と見なされていますし、元服後すぐに結婚することも珍しくありませんでしたから、今の二十代前半よりは大人びていたと思われます。同時に、すでにこの年頃になると、家族に対して大きな責任をも負っていたはずで、僧侶となるということは、たとえ妻帯を前提としていた親鸞聖人の門下であったとしても、武士という身分を捨てて一族から距離を置くことになりますから、よほど強い思いがなければできないことです。

弟子となつてからは、常に親鸞聖人の傍にいて身の回りの世話をしていたと伝えられています。親鸞聖人が京都に帰られてからは、北関東から東北地方に教えを広げていたようです。奥州の外森というところに唯信寺を建てたとされていますが、現在この地名は残っていないため、その場所を特定することはできません。奥州とは言っても今の東北地方では

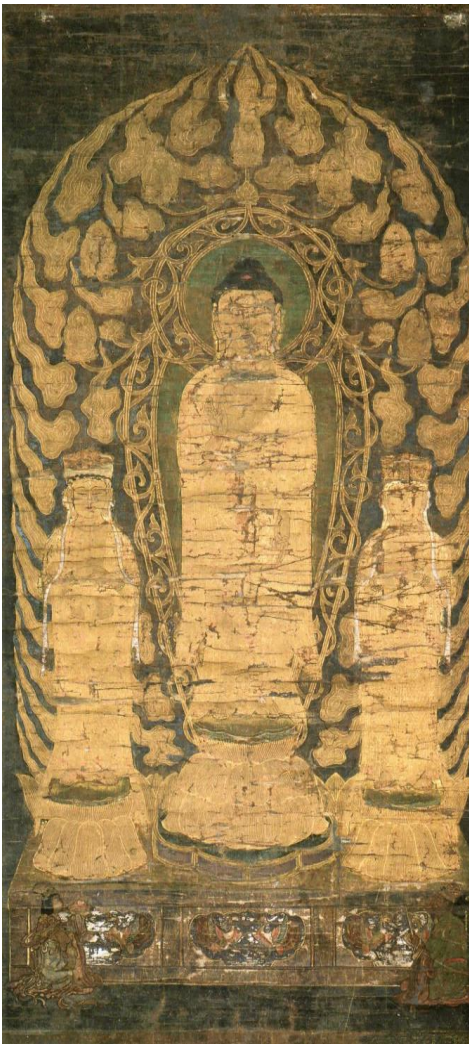
なく、常陸国（現在の茨城県）の北部であったと思われています。

七十六歳で亡くなられたといいますが、当時としては長寿になります。この後、寺は常陸国中部の宍戸に移転し、現在も「外森山唯信寺」として続いています。いつの頃からか「外森」が「戸森」となり「戸森の唯信」といわれるようになりました。つまり、唯信が亡くなった後に、寺は唯信の生まれた宍戸城のある宍戸に帰ってきたのです。

父の宍戸知家は、歴史上では八田知家と呼ばれています。常陸国守護であった八田知家が宍戸に移ったことから宍戸氏を名乗るようになりました。この一族は善光寺を信仰していたことで知られています。同族の小田氏が守護していた石岡の善光寺には小田氏の五輪塔がずらりと並んでいます。宍戸にも新善光寺が宍戸氏によって建立されました。しかし、常陸国を支配した佐竹氏によって、宍戸氏が海老ヶ島

城（筑西市）に転封されると、この新善光寺も宍戸氏と共に移転してしまいました。

以前も触れましたが、親鸞聖人と善光寺との関係は深かったと思われれます。親鸞聖人の少し後に踊念仏を広げたことで知られる一遍聖人も善光寺を幾度も訪れています。一遍聖人を開祖とする時宗の寺院の中には善光寺と同じ本尊を伝えているところもあります（左図）。この時代には、今のように宗派という意識は明確ではありませんでした。寺と神社の区別さえなかったのです。阿弥陀如来を本尊とする善光寺は、浄土系の仏教にとっては特別な存在だったと思われれます。親鸞聖人の弟子となった方々の中には、善光寺に対する信仰がきっかけになった人も少なくなかったでしょう。もともと善光寺に対する信仰が広がっていた北関東であったからこそ、親鸞聖人の教えが広く受け入れられたということが、戸森の唯信にまつわる伝承からもうかがえます。



時宗寺院である滋賀県彦根市高宮寺に伝わる善光寺型如来像。一つの光背の中に三尊が収まり、台座下部にがつがいちょうじゃ月蓋長者とによぜひめ如是姫が描かれているという特徴がある。

徳法寺からのご案内

心の相談室

毎月第四土曜日の午後三時から午後五時まで、横安江町商店街にある「いちよう館」二階にて真宗大谷派の僧侶による「心の相談室」を開いております。個室で相談をお受けします。仏事はもちろん、家庭や職場、学校など、どのようなお話もお聞きします。相談は無料です。予約も必要ありません。相談内容は一切外に漏れることはありませんので、お気軽にお訪ねください。

サンガ茶話会

毎月第一木曜日の午後三時から午後五時まで、横安江町にある東別院敷地内「真宗会館」一階囲炉裏の間にて「心の相談室」スタッフによる「サンガ茶話会」を開いております。座談形式となっております。僧侶やその場に集まった方々とお話しませんか。いろいろな方に聞いてほしい話、聞きたい話がある方はお気軽に参加してください。みんなの話を聞いているだけでも構いません。参加は無料です。予約も必要ありません。出入りも自由です。お茶とお菓子を用意してお待ちしております。

徳法寺秋彼岸

河上真琴創作展

二回目となる河上真琴さんの創作作品展です。硬い鉄で作られたとは思えないような柔らかかで優しい作品をご堪能ください。期間は九月二十日（金）から二十九日（日）までの十日間です。時間は午前十時から午後五時までですが、ご連絡をいただければ時間外でもご覧になれます。入場無料です。



秋彼岸中日及び永代経法要

今回の講師は、住職の友人でもある 浄秀寺住職 大谷大学准教授 藤原正寿氏 です。日程は、九月二十三日（月・秋分の日）午後二時から午後四時ごろまでです。読経の後、法話となります。お誘いあわせの上お参りください。

徳法寺仏教入門講座

毎月二十一日午後七時半より

八月 大乘仏教興隆

九月 ヒンズー教の台頭

一〇月 大乘仏教の思想的展開

十一月 インド仏教の消滅と再生

昨年からはじめました仏教入門講座の第一章インド仏教史も残すところ四回となりました。いよいよ日本に伝わった大乘仏教の登場です。また、インドから仏教が消えていった過程もお話します。来年春からは日本仏教史が始まります。参加費はお賽銭のみです。どなたでもご参加ください。

映画「星に語りて」のご案内

九月十五日（日）横安江町の東別院敷地内「真宗会館」一階ホールにて、映画「星に語りて」を上映します。この映画は、東日本大震災の時、障害者の人たちがどのような避難生活を強いられていたのかを描いた作品です。午後二時から午後五時からの二回上映します。入場は無料です。駐車場も東別院内駐車場を無料でご利用いただけます。

表題揮毫 中田 八千代

徳法寺 石川県金沢市野町二丁目三二番四号

TEL 〇七六―二四一―五二一九

ホームページ <http://tokuhou-ji.com>